
少年の異世界戦記 ~ T O S 編 ~

クロイツヴァルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の異世界戦記 ～TOS編～

【Nコード】

N5082Z

【作者名】

クロイツヴァルト

【あらすじ】

戒翔が渡った世界は二つの世界が魔力を搾取しあう世界であった。そこには再生の神子と呼ばれる存在とそれを追うデザイナーと呼ばれる存在がいた。戒翔は渡った世界で世界にどのような影響をもたらすのか……。

これは戒翔が神になる修行の一環で渡って行くお話です。

stage 0

『此処は…何処だ？』

戒翔が気付いた場所は一面が森しか見えない場所だった

『地球で…は無さそうだな…。8とアルは……人格が破損して修復中…だな……ん？』

戒翔は自身の現状という場所を検索していると草むらの奥からガサガサっという音と一緒に一匹の兎と思われる獣が現れる

『うさぎ？いや、一角獣？俺はまた世界を跳んだのか？つと！危ないな…^{トレスオン}同調開始！』

そうやって戒翔は魔術回路に魔力を通し、両の手に白と黒の一对の夫婦剣、干将白耶を投影した

『行くぞ、飛連斬！』

戒翔は飛びかかってきた兎擬きにカウンターの要領で干将で斬りあげ、白耶で斬りおとすと、それで決まったのか兎擬きは粒子の様なモノに還る

『アレは…マナか？って事はテイルズの世界か？レンズが落ちない所をみればDではない様だな』

戒翔が1人でそう考えを纏めていると先ほどの獣が出て来た奥から

1人の…自分よりも1つか2つ下と見れる少女が戒翔の前まで走って来て転びそうになった所を戒翔は抱き止めて、受け止めた

「大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます!？」

少女が戒翔にお礼を述べていた、そこへ少女が出て来た奥からは身の丈が2メートルを超える熊の様な獣が先ほどの兎擬きが5匹を引き連れた形で現れる

「あッ!？」

『アレに追われてたのか?』

「う、うん。ロイドと一緒に先生に上げる花を探してたんだけど途中ではぐれちゃって」

『それで、迷って歩いていたらあのモンスター達に遭遇した…って事か』

「う、うん」

『……そこから動くなよ?直ぐに片付けてくるから』

「えッ!？」

『喰らえ!魔神拳!』

少女が驚きの声を上げる…が戒翔はそれを無視して近くにいる一匹

の兎擬きに音速で拳を振り抜き、衝撃波を飛ばし、一撃でマナに還す

「す、凄ーい！ー！」

少女が吃驚した声を上げる中、戒翔は次々とその拳で、脚でモンスターをマナに還す。そして

『コイツで…ラストオツ！獅子咆哮おツ！ー！』

戒翔は両手に溜めた気を獅子の形にして解放して、最後に残っていた熊のモンスターをマナに還すと辺りを見回して他にいない事を確認すると構えを解く

『だいじょ、コレットに近付くな！』ん？』

戒翔が少女に近付こうとすると戒翔の横を横切る様にして鷲色の髪を立たせた少年が走る。そして、そのまま二本の木刀を戒翔に向け、少女を後ろに庇いながら対峙する

「このやろつ、これ以上近付くな！コレット、大丈夫か？」

「ロ、ロイド！？ち、違つよー！」

「先手必勝！てりゃー！ー！」

『ちツ！』

コレットと呼ばれた少女がロイドと言った少年は戒翔に襲い掛かって来た

「虎牙破斬！」

少年は戒翔に向けて木刀の一つを振り下ろした

『甘い！』

「なッ！？」

『少し、大人しく…しろ！烈破掌！』

「ぐあッ！」

「ロイド！？」

戒翔は左腕でそれをいなし、右の掌を少年の腹部に当てると掌から気を爆発させて少年を吹き飛ばした

「くッ、コレット…逃げろ！」

少年、ロイドは戦意を戒翔を睨み付けながら少女、コレットに叫ぶ

『失礼だが少年、君は少しは冷静になつて欲しい。』

「なんだと！！」

「あ、あのねロイド？違うの！この人はわたしを魔物から助けてくれたの！」

「……………えっ？」

それから暫くして

「ほんつとにゴメン！！」

『いや、誤解が解けたのなら構わない。寧ろ此方が謝らなければならぬだろ？見知らぬ人間には当然の反応だし、妥当な判断だ。』

そこには少年、ロイドが戒翔に両手を合わせて謝罪をしていた。そして、謝られている本人は苦笑をしていた。

「あの、助けてくれてありがとうございます！わたしの名前コレット・ブルーネル、マナの血族で神子です、よろしくね」

「俺はロイド、ロイド・アーヴィング」

『（素直に言ったら変だな…）俺はカイト・クロイツだ』

「カイト…か、カイトはこんな所で何をしてんだ？」

『恥ずかしい話だが、旅の途中で立ち寄ったこの森で迷子になって困っていた所だ。』

「それならわたし達の村に来ませんか？」

『はっ。』

「お！コレット、それ良いな！良し、決まったなら善は急げだ！」

「おー」

『は？ちよっ、待て！早く行こ？』（しょうがないな）…解った、案内を頼む。コレット』

「うん！任せて」

そして、ロイドとコレットの2人に道案内をしてもらい信託の村イセリアに着くとセミロングの銀の髪を持ち、少しキツめの目をした女性が此方に近づいて来るのが見えた

「2人ともどこに行っていたの！」

「げっ、先生!？」

「リフィル先生だ〜」

銀髪の女性、リフィルと呼ばれた女性は近くに来た途端に凄い剣幕で2人を怒鳴る。その際にロイドはしまったと、コレットはほんわかした感じの反応で声を出していた。

「あら？そちらの男性は？」

「わたしが魔物に襲われた時に助けてくれたんだよ？」

「魔物に？まさか！あなた達は外に出ていたの!？」

「「う、ごめんなさい!」」

『まあ、2人は悪気があつて出た訳ではない様だしそこら辺にしてはどうです? 貴女に感謝を込めて何かを探していた様だからな』

「はい、先生いつも勉強を教えてくれてありがとうございます」

「花? いい香りね」

「良かったな、コレット!」

「うん」

「だからと言って外に行った事は許しませんよ? 罰として、あなた達には反省文を書いてもらいます!」

「そりゃないぜ、先生」

「ロイド、頑張ろ?」

『それじゃ、俺は宿屋をさが「此処には宿屋はないわよ?」……なに?』

「ここは観光地とは違うから宿屋はないわ」

『そうなる打野宿「あ、あの!」…ん?』

「わたしのお家に来ませんか? 助けて下さったお礼もしたいですし」

「そうね、ならコレットはその……ごめんなさい、名前を聞いてなかったわね。わたしの名前はリフィル・セイジよ。改めて2人を助けてくれた事を感謝するわ。」

『いや、たまたまに過ぎない事だし、当然の事をしたただけだ。俺の名前はカイト・クロイツだ。』

「コレットはそのままその人を案内してあげなさい。ロイドはわたしと一緒に来なさい」

「ええー！そりゃないぜ！」

「ロイド、ごめんね？」

『済まんな、こればかりは俺には………な？』

「さっ、行くわよ？」

「だっ、イタタタッ！？先生、痛いって！」

自己紹介を済ませて、リフィルはロイドの耳を摘んで校舎と思われる建物の方へと歩いて行く。ロイドの悲鳴を響かせながら

「行こっか」

『………そうだな。（ロイドの奴、大丈夫か？）』

連れて行かれたロイドを見ながら、カイトはコレットに案内され、村の中でそれなりに大きい二階建ての家の前に着いた。

『此処が…』

「うん、わたしの家だよ」

そして、コレットが家のドアを開ける

「コレット!?!どこに行っていたんだい?心配したんだよ?」

「お父様、心配を掛けてごめんなさい。」

コレットがそう呼ぶのはコレットと同じ髪の色で、短く切り揃え、真面目な印象を与える男性だった。

「コレットが無事でなによりだよ。…それで其方の方は?」

「この人はカイトさんって言うんだよ」

『クロイツ・カイト、旅をしています。』

「わたしの名は、フランク・ブルーネル、コレットの父親さ。」

「お父様お願いがあるんだけど」

「なんだい?」

「カイトさんをお家に泊めてあげたいんだけど」

「それは…良いけど、どうしてだい？」

「それは…『俺が説明します。』…カイトさん？」

カイトを何故、泊めたいのかを父親に聞かれたコレットが気まずい顔をしているとカイトが少し前に出て告げるとコレットが「何故？」と不思議な顔をして、カイトを見上げていた。

『よろしいですか？』

「良いとも、説明をお願いするよ。」

そして、カイトがコレットに会った時の一部始終の話をした。

「…そう、ですか。そう言う訳でしたら歓迎いたしますよ？コレットを守ってくれた事、心から感謝します。」

そしてその後、もう1人、この家の住人であるファイドラ…コレットの祖母にして先代神子の妹であり、今のシルヴァラントにおける祭司達の育成係の様な事を行っている。そのファイドラに自己紹介をして、夕食を食べた後、カイトがコレットに案内されて入ったのは一つの空き部屋であった。

「ここがカイトさんの寝る部屋だよ。」

『助かったよ、コレットに会わなかったら俺は野宿確定だったからね？』

「わたしこそ、助けてくれて『ちよつと待った』…え？」

『その喋りはどうにかならないのか？そんな畏まった喋り方をされるとむず痒くて堪らないんだ。』

「なら、カイトさ…カイトもだよ？」

『そうか？』

「うん」

『わかった。それじゃ、おやすみ。』

「おやすみ」

そう言ったコレットが部屋を出た後、カイトは部屋の窓から外を見る。

『「この世界に渡った理由は解らない…」が、シンフォニアと言う事が解った…なら、やる事は決まったな…。』

そう言ったカイトはベッドに入ると直ぐに意識を落とした。

stage0 (後書き)

ご感想とご意見、アドバイスをお待ちしております。

stage 1

カイトがこの世界に訪れた翌朝

『ん、朝……か。』

カイトは太陽が少し出た所で目を覚まし、ベッドから出た。

『ふあゝ……さて、いつもの日課をやりますか』

カイトの格好昨日のままでは超アラガミ繊維で編まれたトレンチコートとズボンに、刃引きした剣を二本、腰に差して一階に下りた。

「カイト殿、起きるのが早いですな。」

『ファイドラさん、おはようございます。』

「朝早くどうしたのじゃ?」

『いえ、少し外で朝の鍛錬をと』

「そうですね、なら朝食の時間がきましたらコレットを迎えに行かせようかのお?」

『それでしたら広場で鍛錬をしていますね』

「いつてらっしゃい。」

ファイドラと挨拶を交わし、外に出たカイトは村の入り口にある大木の近くまで早朝の清々しい空気を感じながら向かう。

『この空気は良いな……。そして、このとてもものどかで暖かい感じ。朝の鍛錬がやりやすい』

カイトはそう呟き、腰に差していた剣を抜き、前の世界からやってきた敵を仮想し、^{イメージ}相対する鍛錬を始める

『（俺が想定する敵は…… B E T A、予測不可能な敵）』

カイトが目を瞑り、瞑想して出すのは世界の……人類の敵、B E T A。その中でも小型に部類する闘士級、戦士級と数が多く、いつも戦場に置いて、生身の衛士と数多く相対するモノ

そして、カイトは双剣を仮想の敵に振るう。

『はっ！』

その剣は敵対するモノを

『せいッ！！』

その剣は護る者の為に

『たあっ！！』

その剣は自身の為に

『^{ラスト}最後おッ！！』

振るわれるのは自身の使命を果たす為に……。

『…こんなものか……?』

そして、そうして区切りを着けて腰の鞆に戻した所で後ろの方からパチパチと拍手をする音がし、後ろを向くとコレットが向日葵のような笑顔でこっちを見ていた

『もう朝食の時間か?』

「うん、そだよ。おばあ様にカイトを呼んでくる様になって」

『そうか、それじゃ行くか。』

「うん!」

そして、カイトとコレットが家に帰るとちょうどコレットの父親…
フランクが朝食を運び終えた所であった。

そして

「へえ、カイトくんはそんなに上手だったのかい?」

「うん!まるで踊っているみたいですよかったですよー」

『踊ってるって、そんなに見ても楽しいものじゃないぞ?』

「ほっほっほっ、コレット、カイト殿が困っておるからその辺にしておきなさい。」

「はい」

そして、その後も和やかな雰囲気のまま食事の終わりに、少しの間コレットと話をしていくと

「コレット、そろそろ時間じゃないのかい？」

「あつ、いけない！学校に行かないと」

フランクに声を掛けられ、コレットが慌てた様子で身仕度をする。

『学校か？』

「うん、お父様、おばあ様、カイト行つてきます」

コレットが家を出た後はファイドラとフランクと一緒にお茶を飲んでいくと

『ッ！……なんだ？』

「フランク、信託がおりた。わたしはマーテル教会聖堂に行くよ。」

「わかりました。お気を付けて」

窓から溢れる光が射した後、ファイドラはフランクにそう言う外に出る。その際にフランクはどこか悲しみを感じさせる表情をしていた。

『何か…あるのか？』

「信託がおりたからね…、コレットはマナの神子だからあの光は信託がおりた合図だね？コレットはこれから神子として世界再生の旅にでる為に儀式を行うんだよ」

『そう…か。』

フランクがそう告げるとカイトは間を置いて席を立つ。

「どこに？」

『そのマーテルの教会に…：…妙な胸騒ぎがしてならないからな。』

「そうか…。旅人をしているカイト君には失礼だろうけど、気を付けるんだよ？」

『ああ…。それじゃ、行ってくる』

フランクにそれだけ告げるとカイトもファイドラと同様に村の入り口の反対側から外に出た。

そして

『ツ！？（血の臭い？やはり、悪い予感と言う物は良く当たる様だな！）』

暫く歩き、魔物を倒しながら行くと風に乗って血の臭いがカイトの鼻を突き、カイトは一気に教会の階段まで駆けると階段の横に神官と思しき老人が横たわっていた。

『おい、だいじょ…：！（既に事切れている…：か）アレは…！』

カイトが神官だったモノから上階の教会に目を移すとそのままに教会に行こうとしている特徴的な金色の長髪の少女に、鷲色の髪の青年に、銀髪の髪の少年が階段を上っている所であった。

『チツ！（もしも、まだ上で戦闘が行われているのなら……）間に合えよー！！』

カイトが急いで階段を上って、教会に辿り着くとロイド達の前に2メートル強の目元まで隠すヘルメットの様な物を被った巨漢がコレットに向けて、その手に持つ棘のある鉄球　モーニングスターを投げつける所であった。

「コレットッ！？」

「あ……」

「死ねえー！！」

そして、鉄球が投げられ、ロイド達は周りにいる同じ被り物をした奴らに足止めをされていた為にコレットの名を叫び、コレットは自身の命をいままさに叩き潰さんと迫る物にか細い声を上げる

しかし

『やらせると思っか？』

「下がってる」

「え…？カイト…ト？と…誰？」

「なッ！？」

「カイト、助かったぜ！」

「あ、あの2人、誰なの！？」

コレットは衝撃の痛みが来ない事と、今ここにいる筈のない人物の
声が聞こえる事が不思議に思い、そつと目を開けると、そこには鉄
球を片手で受け止めるカイトと赤茶けた髪に強そうな剣士が目に入
る。そして、その目の前で起きた事にその場にいたメンバーは各々
な反応を見せる。

「カイト、助けに来てくれたの？」

『たまたまだ…。悪い予感がするから来てみれば、案の定って訳だ。
来て良かった…。コレット、怪我は無いか？』

「わたしの出る幕ではなかった様だな…」

『いや、見たところアンタは剣士だろ？コレット達を守ってくれ。』

「承知した」

「うん」

「こ、この野郎ッ！このヴィーダル様を無視するんじゃないやねえよ！！」

巨漢の男はヴィーダルと名乗り、自身を無視するカイトに向かって
その巨体を使って体当たりをしようとする…が

『遅いな…、掌底破!!』

「がはッ!?!」

『まだまだ! 臥龍空破! 鷹爪落爆蹴! 三散華!』

鉄球を砕いて、カウンターの要領で相手の胸に掌底を打ち込み、ヴィーダルがそれによるめいた瞬間の隙を突き、懐に入ると氣を水性質変化させたモノを纏った拳のアップercutでヴィーダルの顎を打ち抜き、ヴィーダルと共に空中に飛び上がった状態から氣を纏った蹴りを三連続当てて、回し蹴りを喰らわす。此処までの怒涛とも言える連撃にヴィーダルは声を出す暇もなく滅多打ちにされてその際にまたよろめく

『トドメっ! 爆炎… 双掌打!!』

「グアアアアッ!!!」

そして、カイトがそう叫びヴィーダルの水月に炎を纏った両手を打ち込んで吹き飛ばした。

「クッ! キサマがでてくるとは…:… やむを得ん、撤退だ!」

そう言うとは他の連中とは違う男が階段を走り抜け、それに続く様にして部下と思しき者達も逃げた。…:… ヴィーダルは何時の間にかいなかった。

「おばあ様、御無事ですか?」

「おお、無事じゃとも。…しかし、護衛の神官達はディザイアンの者達に」

「ならば、わたしを雇わないか？」

「お主は？」

「わたしの名はクラトス・アウリオン…傭兵だ。金さえ用意するなら護衛をしよう」

「背に腹は代えられん、クラトス殿頼まれてくれますかな？それとカイト殿も」

『……俺が？』

ファイドラがクラトスを護衛を依頼し、それと一緒にカイトにも頼む。カイトはそれに疑問を持つ

「カイト殿が旅をしているのは重々承知の上……どうかお願いしませう」

『ああ、まあ、良いよ。旅は1人じゃつまらなかった所だし、その依頼…承諾するよ。』

「おお、よろしく願いしますじゃ」

「俺も行くぞ！」

「ロイドか、お前だと心許ないのぉ」

「ロイド？お前はロイドというのか」

「人に名前を聞く前に自分が名乗るのが礼儀じゃないのか？」

『既に知ってるだろ』

「い、一応だよ」

「お前では無理だ」

ロイドが乗っかる様にして言うがクラトスがそれをバツサリと切り捨てる

「なんでだよ！」

「これは遊びではない。お前のような腕の未熟な者はただの足手まといにしかならん。大人しく帰るんだ」

「……わかった。なら、勝手についていく。ジーニアス、勿論付いて来てくれるだろ？」

「ぼ、僕も！？」

『……まあ、帰れとは言ったが勝手に付いて来るなら仕方ないんじゃないか？』

「子供の遠足ではないのだが……勝手にするがいい。」

ロイドにジーニアスと呼ばれた少年は驚愕し焦る中、クラトスはそう告げると先に教会へと足を進める。それをカイトは見ながら後ろ

ではしゃぐ3人を急かして共に中に入っていく。

そして、石造りの教会の中に入ると、中は所々崩れており、廃墟の様な雰囲気となっていた。

「ここがマールテル教会」

「ボロボロだね」

『遺跡に近いものだからな。バラクラフ王朝や旧トリエツト跡…他にも貴重な情報が眠っている遺跡は、文献を見る限りではどこも同じ様な状態だ』

「詳しいんだね」

『君は？』

「僕はジーニアス・セイジ、よろしく」

『カイト・クロイツだ。……ん？セイジ…リフィルの弟か？』

「姉さんを知ってるの？」

『まあ…な。村に着いた時にな』

ロイドと銀髪の少年の言葉にカイトは旅人として演技をする。

「なんか怖いね」

『どうやら魔物がいる様だな…』

「お前も気付いたか？」

『醜悪な気配が一带に満ちているからな』

その傍らに立つコレットが周りを見て身震いをして告げる、とカイトは鷹の様な鋭い目で辺りを見回して零すと、クラトスが声を掛け
てきた。

途端に上の方から虫の怪物に床下からは幽霊が現れた

「来るぞッ！」

『ロイドとクラトスは前衛、ジーニアスと俺は中衛、コレットは後衛…良いな!』

「おう！」

「うむ！」

「わかった！」

「まかせて」

カイトの言葉に各々が返事を返すとクラトスとロイドは敵に突っ込み、ジーニアスが詠唱をする。

「燃えちゃえ！ファイヤーボール！」

「瞬刃剣！」

「魔神剣！」

ジーニアスの魔術を放つのと同時にクラトスが速度のある突きを放ち、ロイドが剣圧を飛ばす。それに耐えれずに虫の怪物 スパイダーはマナに還る

「ピコハン！」

『喰らえ、バーニングブラスト！』

コレットがピコハンで敵の動きを封じるとそこにカイトが腰から拳銃型の晶霊銃二丁を抜き放ち、敵に火属性の弾丸を無数に放つ。こちらの攻撃もゴーストはマナに還る。

『この魔物は気負いするほどでも無いな』

「カイトって強いんだね」

『旅をしていると自衛の為にやらなければならなかったからな。コレットは大丈夫か？』

「うん、だいじょぶだよ？」

「下の階に行こうぜ！」

「あつ、まってよ…！」

『やれやれ、少しは落ち着いて行動が出来ないのかねえ』

「そうだな」

そんな事をボヤきながらもロイド達を追ってカイトとクラトスは走る。そして

『アレが【ソーサリーリング】か？実物を見るのは初めてだな……』

「アレがあるだけで様々な仕掛けを解く事が出来る様になるな」

カイトとクラトスは階下に安置されてあるソーサリーリングを見て話をし、ロイドとジーニアスもその横で話をしていた。すると

「ねえ、コレってなんだろうー？」

『ん……？ばツ、危ない！？』

「きゃっ！」

コレットが興味の上を上げるのでカイトがそちらを向けばコレットが石の魔物 ゴーレムを触ろうとしていた。それをカイトは急いでコレットに近付くと抱き寄せて跳躍をする。間一髪の所でゴーレムは腕を伸ばし、体ごと回転していた。それを見たカイトは心底コレットが無事で良かったと思う。

『危ないから、周りの物に無闇やたらに触るな』

「う、ごめんなさい。」

『無事で何よりだ。』

「コレット、だいじょうぶか！」

『アレに興味を抱くのは良いが、コレットを護らないとだろっが！』

「わ、わりい」

『つたく、刻め！エアブレイド！！』

カイトがコレットを胸に抱きつつ、銃口をゴーレムに向け、風の刃を弾丸として放つ。ゴーレムの体はその風の弾丸により、命中した瞬間に何度も切り刻む。すると

「あれ？動かなくなっちゃったぜ？」

ロイドが疑問に思っつ突つつくがゴーレムはただの岩の塊となっており、なんの反応も示さなかった。

「コレ、どうするの？」

『コレは「あ、あの！」…ん？』

「も、もう大丈夫だから／＼／＼／＼／＼（カイトの顔が近いよー／＼／＼／＼）」

『ん？ああ、済まない』

「コレはどっするのだ？」

『あの床の穴に落として階下の通路の穴を塞ぐんじゃないか？』

「なるほど」

取り敢えず、コレットを離してからジーニアスとクラトスの疑問に答えると2人は納得したのか元ゴーレムを穴へと落としていた。すると今度はゴーレムが三体出現した。

『コレットは俺の後ろにいるよ？』

「う、うん」

『ロイド、ジーニアス、クラトス！時間稼ぎと奴らを一カ所に留めるのを頼む！』

「なにすっかわかんねえけどわかったぜ！」

「了解した！」

「わかった！」

そして、カイトは二丁の晶霊銃を一本に連結させ、ケイジ内の晶霊力に圧力を掛け、密度を高める。

「カイト、準備はまだかよ！」

『良いぞ！全員離れる！』

カイトの言葉に3人は弾かれる様にして散開する。そして

『喰らいやがれ！エアブレイドバスター！！』

瞬間、カイトの手にある長大な銃ライフルとなっていた晶霊銃から巨大な緑色の弾丸が軌跡を残しながらゴーレム達を切り刻んだ

『任務…完了…ってか？』

ゴーレム達をただの岩に変えた後にカイトは連結させた晶霊銃を肩に乗せてそう告げた

「すごい！」

「カイト！なんだよアレ！」

「魔術なの！」

『魔術とはちよつと違うな…。今度説明してやるよ。』

「その銃から高濃度のマナが収束し放出されたな？」

『ちよつとした古代遺物の様な物だ。取り敢えず、仕掛けを解いてソーサリーリングを取りに行こう』

「いー」

そして、仕掛けを解いて、ソーサリーリングを回収し、カイト達は一階に戻ると奥にある封印が施された扉の前に立つ

「いよいよだな」

『コレット、大丈夫か?』

「…うん。大丈夫」

『クラトス…後を頼む』

「カイトはどうするんだよ」

『なに、招かれざる客の対応を…な』

「えっ?」

その瞬間、床の一部が吹き飛び、階下から砂塵と共に何かが飛び出してきた。

『行け!!』

「でも!?!」

『クラトス!!』

「わかった」

『ロイドとジーニアスもだ!!』

「すぐに戻るからな!」

「怪我しないでよ!」

カイトの言葉にコレットが否を言うがクラトスに無理矢理、転送装置へ乗り、ロイドとジーニアスもそれに続く。

『たく、こんな所で原作とは違う展開は止めて欲しいものだな…』

砂塵が晴れると其処には二足で立ち、手は無く、鬼の様な顔に長い尾を持つモンスターが現れる。

『アラガミ……オウガテイル…か』

「ガアアアアアアッ!!!」

『丁度良い……腹が減ってきた所だ……。オウガテイル、キサマを喰らってやる!!』

そして、カイトは駆け出した。

↳コレットside↳

『行け!』

「でも!?!」

『クラトス!』

「わかった」

わたしがカイトを…仲間を置いていけないと言おうとするとカイトはクラトスさんの名前を呼んで、クラトスさんはわたしの手を取って機械の上に立つ瞬間、光がわたし達を包んだ。

気が付くと大広間の様な場所にわたしとクラトスさんは立っていた。その後ろからロイド、ジーニアスが出て来た。

「クラトスさん！なんで、カイトを1人に「アイツは神子の試練を優先したに過ぎない」…だけど！」

「神子はアイツが簡単にやられると思うか？アイツはこの近辺の魔物に負ける様には見えない…。それにアイツが任せると言ったのだ。神子は神子のやるべき事を成すのだ」

クラトスさんの言葉にわたしは何も言えなかった。カイトは先に行けって言った。けど、なにか嫌な予感がしてならなかった…。それに、クラトスさんの言う様にカイトの心配をするよりも、わたしのやるべき事を優先しろって言葉になにも言えなかった。カイト、どうか無事でいてね？

〈コレットsideout〉

封印の間入り口付近

『「ごちそうさま…っ」と、オウガテイル位じゃ腹の足しにならない…か。」』

「カイ！」

「無事の様だな」

カイトがオウガテイルを倒して石段に座っているとコレットとクラトスが封印の間から戻ってきたのであった

『コレットにクラトス？儀式は終わったのか？ロイドとジーニアスは？』

「ああ、無事に信託は下った。我々は一足先に村に戻る事になる」

「2人はまだ祭壇の所にいると思うよ？」

『そうか…』

2人にロイド達の事を聞いて、今後の事について考えていると

《だ……………き…て》

『……………ん？』

「どうかしたか？」

『いや、何か聞こえなかったか？』

《誰か…僕に…気付いて》

『また、聞こえた』

「……………なにも聞こえないが」

「わたしも」

『どこ…に…』

カイトが思考にふける直後に頭の中に語り掛ける様に誰かの声が聞こえたが、2人には何も聞こえていない様でカイトは周囲を見渡すと崩れた壁の向こうに様変わりしたサーベルの柄が見えた。

『コレ…は』

カイトは見つけ出したものを引き抜く。それは鞘に収まった状態で形状はサーベルの様な物に持ち手のやや上の所に光に反射する綺麗なレンズの様な物が埋め込まれていた。掲げるとそのレンズが煌めいていた。

「それは…剣…か？」

『見た感じは剣…のようだが、何故此処に？骨董品か？こんな場所であれば誰かが気付いたと思うが』

「カイが貰っちゃったら良いのかな？」

「素手のままでは手強い敵にあつた時に苦戦するだろうから、持っていくのも悪くはないな」

『そう…だな。持っていくか』

コレットの言葉にクラトスも同意する。拾った本人であるカイトはサーベルの様な剣を腰に差す。

「さて、村に戻るとしよう。今後についての話し合いをしなければならぬからな」

クラトスはそれだけ言つとさつさと自分だけ先に歩いて行つてしまふ。

『行くか』

「そだね」

そして…

…信託の村イセリア コレットの家…

「それでは、神子様の護衛にはクラトス殿とカイト殿にリフィル先生の3人でよいな？」

「カイト殿、クラトス殿神子様をお願いしますじゃ。」

「この依頼を引き受けよう」

『俺がどこまでやれるか解りませんが、尽力させていただきます』

「そんな謙遜をしないでください。カイト殿は旅をしていたのじやから」

そう話をしていると

「コレット！俺達も一緒に旅に出ても良いよな！」

「ダメだ」

「なんでだよ！」

「神子の旅は聖堂とは訳が違う…。子供は大人しく村で留守番をしている」

「ロイド、わたし達はまだ話が終わってないのだ。さっさと出て行かんか」

「クツ！」

「「ロイドツ！？」」

クラトスとイセリアの村長の言葉にロイドはコレットの家を飛び出したがそれを追う様にジーニアスとコレットが出て行く

『まったく、アンタは意地の悪い事をしるんだな…。怪我をされたら堪らないからって』

「なんの事だ？」

『まったく、こつ言う言葉もあるんだ…子供には旅をさせろ…ってな』
『？』

「……………」

『ファイドラさん、少し用事を思い出したので席を外させてもらってよろしいですか?』

「用事とは?」

『旅の支度ですよ。明日に出立するのなら、早めに揃えておく必要がありますからね…。』

「そうか、なら帰ってきたら決まった事を話すのでしょうか」

『いつてくる』

カイトはそれだけ言うとコレットの家を出る。

『さて、砂漠越えをするとなるとロープに十分な水も必要だな…。』

《後は夜に備えた耐寒具も必要ですよ?》

『確かに…。』

《やっぱり、聞こえてますよね!? なんですつと無視するんですか!?!》

そう…聖堂から家に帰り、話し合いをしている最中にもこのサーベル擬きはつとカイトに話し掛けていたがその全てをカイトは無視していたのである

『1人で喋っていたら頭の逝った奴と思われるだろうが』

《す、すみません》

『…で、お前は？』

《僕の名はシャルティエと言います。漸く坊ちゃんと同じマスターに会えて嬉しいですよ》

『坊ちゃん？……リオン……いや、エミリオ・カトレットの事が』

《ど、どうしてそれを知っているんですか！？》

『俺は異世界から来た人間でな？ティルズオブディステニーという物語でシャルティエ達を知っているからだ』

《……嘘ですよね？》

『半信半疑なのは解っている…が、信じてくれ。ディステニーと言う物語を通じてシャルティエ達を俺は知ったと言う事を』

《信じますよ、坊ちゃんの名前を知っているんですから》

カイトの言葉にシャルティエはそう告げ、この世界の成り立ちを軽く教えた

《つまり、世界再生は荒廃した世を復興すると言う事ですか》

『そうだ。そして、その世界再生の旅に俺も行く』

《コレットって言いましたっけ？あの子が世界再生の要で、デザイナーアンと言うハーフェルフに狙われている…ですか。》

『シャルティエ、あの子を…コレットを護る為に力を貸してくれるか？』

《勿論ですよ》

その瞬間、カイトがシャルティエのマスターとなった。

『さて、準備は整ったし戻るとするか』

《そうですね。カイト、これからよろしくお願いします》

『じつちこそ』

そう話をしながら1人と1本は家に戻るのであった。

s t a g e 1 (後書き)

感想にご意見をおまちしております。

Stage 2

カイトがシャルティエのマスターになった翌朝……

『準備は大丈夫か？』

「……うん」

「旅支度は万全よ？」

「それでは行くとするか」

村の入り口前で再生の旅に向かう4人は村の人間に見送られる形で立っていた。

「姉さん、ロイドがまだ……」

「ジーニアス、ロイド1人の為に時間は遅らせられないの」

「……うん」

「行くぞ」

「御子様どうか世界の再生を頼みます」

「はい、御子は必ずや世界再生を成功させます」

そして、4人は村を出て目指すは最初の試練……火の封印……トリエツト砂漠に向かう

その前に4人は砂漠に向かう前に旅人が立ち寄る導きの小屋へ向かう

『取り敢えず、此処で砂漠横断の際の最終準備を済ませます。』

「そのまま行けないの？」

『砂漠を甘く見たら行けないぞ？日中は太陽の照りだしで暑く、夜中は一気に冷え込むから寒暖の差が激しい。水分の十分な確保に夜間に備え、マントやテント等を用意するが今回は水分と食料品だけ確保する』

砂漠対策に立ち寄った救いの小屋前で対策様に調達をする事を提案するが砂漠に来た事が無いコレットは疑問に思ったのか質問をする。それに対してカイトは知識として知っている事と自分の持つ物を考え、コレットに告げた。

「マントやテントはどうするのだ？」

『テントは俺が持ち歩いている物があるし、マントはイセリアでコレットとリフィルのマントを作ったからな。』

「準備が良いわね」

『俺に取ったら何でもない事だし、全員に合う様にゆったりとしたサイズにしてあるから心配するな』

「いつ作ったのだ？」

『ん？何時いつつて…村を出る前日辺りに2着でクラトスのは予備で持っていた物だから実質2着を一夜で作製したって所だな』

「どんな作りなんだ？」

『少し待つてくれ……』

クラトスに聞かれカイトは背負った荷物を地に下ろすと口を開けてガサガサと荷物を漁り、二枚畳まれた布を取り出すとコレットとリフィルに手渡した。

「うわあ、カイありがとう」

「助かるわ」

『クラトスと俺には付いてないが、2人のマントにはある呪まじないは編みである』

「呪い？魔術とは違うのかしら？」

リフィルの疑問にカイトは頷きながら説明をする

『呪いとは主に祈りや守護を司るモノの力の媒介として用いるのだが、そのマントに施した呪いは水精の加護で、ウンディーネの力で暑さから身を護る作用がある。勿論、火の魔術に対しても有効だが俺が編めるのは1日に2つまで……それ以上は流石にキツイ』

「魔術はエルフやハーフェルフ、そしてエクスファイアを装備し、その力に目覚めた者のみが初めて使用する事が出来る。それとは違うのか？」

『魔術は主にマナを使役する形で発動するが、呪いはあくまでも媒介もしくはその依り代としての役目しか持たない。だから、各属性に合う術式をマナとは違う生命力：所謂、氣と呼ばれる物を練り、糸にソレを浸透させて編む事で呪いは完成する。別に魔力を編み込んでも対して変わらないが？少々、編み込みが複雑な事と氣や魔力を練り、浸透させる事に多大な集中力に糸を編み込む時にも練りながら浸透させる持続力がないと無理だ』

「現状では貴方だけという訳ね」

「凄いね」

『ちなみにそのマント兼ローブには水精の加護と地精の加護を…水精は名の示す通りに火から身を護る為に、地精は破損し辛くする為、後は防御力の向上だな。ソレだけで水と地属性に対してかなりの属性防御力がある』

「大事にさせて貰うわね」

「わたしも」

カイトが手渡したマントをリフィルとコレットは受け取った。

『コレットとリフィルは宿で先に休んでくれ、俺とクラトスで水と食料品の確保をしておく。それとは別に俺はコイツに合う剣を見繕う』

そう告げるカイトは腰に差したシャルティエの柄を軽く叩く

「そう、ならわたし達は先に」「あの一！」「どうしたのかしら、コレット？」

「先生、わたしもカイと一緒にいったら駄目ですか？」

「どうしてかしら？」

「なら、わたしは水と食料品を見る。お前は御子と一緒に武器を見てくると良い」

コレットがリフィルにカイトについて行くと言うとクラトスは1人で調達すると告げた

『なら、一緒に行くか』

「うん」

・・・市場・・・

「色々な物が置いてあるねー？」

『そうだな…』（武器は短めか…シャルに合う物をサーベルかまたはアトワイトがいれば）ん？おっさん、その水晶体は？』

コレットとカイトが武器や防具が乱雑に置かれた売り場にてカイトはふと露店にある掘り出し物や骨董品の様な物を取り扱っている場所である物に目がいく

「おっ、コレか？コレは旧トリエット跡の付近で掘り出された物で

な、買い取ったは良いが用途がてんで解らんだ。兄さんがもし買うのなら50ガルドでどうだ？」

『50ガルド？そんな額で良いのか？』

「こつちとしちゃあ、厄介払いが出来るし在庫管理が大変な訳よ…
…で、どうするんだ？」

『なら、その水晶体と窪みがあるグローブと一緒に頼む』

「毎度！水晶体とグローブで締めて200ガルドでさあ！」

露店でグローブと水晶体を購入した2人は次に武器を見に行く。店の前には剣が並べてあり、その周りには樽の中に乱雑に入れられた槍や斧に剣と粗末に扱われている物もあった

「いらっしやい！剣をお探しですか？それとも槍を」

『見て決めさせて貰う』

「じゅっくりと」

「どんなのを探すの？」

『そう…だな、シャルと同じ様な物か、小回りの利く小太刀の様な
《貴方、シャルティエを持つてるの！？》……ん？』

店主と話をし、コレットと一緒に樽の中にある物を見定めながら話をしてしていると頭の中にソプラノ調の音が響く

『これは……』

「ソイツはナマクラですぜ？上段にある物は多少値は張りますが保ちが良いですぜ？」

《ナマクラ……ね》

『（やはりS・Dソーディアンか）オヤジ、この剣を貰っぞ』

「《えっ？》」

「それでよろしいので？」

カイトの言葉に店主は戸惑いの声を出す

『ああ、構わない値はどれくらいになる？』

「ソレでしたらナマクラですから50ガルドで」

《ナマクラ……50ガルド……》

『（今まで散々言われたのか？）』

しばらくし……

シャルにアトホワイト、ソーディアン同士と話をさせてカイトとコソットは露店を見て歩いた

「色んな物みたねー」

『そうだな。帰ったらコレを装備してみるか』

「宝石みたいだね？」

『まあ、見た目は宝石だな』

「違うの？」

『今は無いが近い内に使うかもしれないな。コレットは何かいるものはあるか？』

「ウーンと…今は無いかな？」

『それじゃ戻るか』

そして、全員が揃い各々に過ごす。リフィルは小屋に来るまでに出会ったモンスターの情報を整理し、クラトスは剣を一（カイトの分も）磨き、カイトは厨房を借りて夕食の支度をしていた。

そして、コレットはと言うと

『違うぞ？そこはこう、切るんだ。』

「わあ〜。綺麗だね」

『じゃ、そのまま続けてな？』

「はい」

厨房で俺の手伝いをしていた。家でも手伝いをしていたのかある程度は大丈夫だった。

普通に料理する分には、問題は無かった。

そう“普通”には

『クラトス、リフィル出来たぞ』

「あら、ありがとう。」

「む？神子。どうしたのだ？」

クラトスがまだ厨房からコレットが出てこない事が心配なのか声を掛けるが今は無理だな……

「フラフラだよ〜」（汗）

「え？」

俺が今回作ったのは炒飯と餃子だ。炒飯を炒める時に鍋を振ったのだがコレットがその鍋の動きをじっと見つめていたのか目を回した様なのだが……………

これは、ドジの内に入るのか？

そして、食事を済まし床につく

“かさっ”

『ん？』

微かな物音に気が付き、其方の方を見ると出ていく金の髪…………

『ったく、危ないな』

《危ないですね》

《1人じゃ危ないわね…。》

『解ってる』

カイトはシャルティエとアトワイトを腰に差すとコレットの後を追

う形で小屋の外に出る

『コレット……』

カイトは風に髪を踊らせながら、月を見上げるコレットを見つけ、声を掛け忘れ魅入っていた。

「カイト？どうしたの？」

『あ…ああ、こんな夜中に外に出ていくからな』

「ごめんね？」

『あまり一人で出歩くな。危ないだろ』

「ん？カイヤクラトスさんがいるから平気だよ」

カイトの言葉にコレットは首を傾げて答えにならない答えをした。

『何か…あつたか？』

「うん…」

この反応は多分……

『ロイドの…事か？』

カイトの言葉にコレットは、はっと目を大きくしてカイトを見る

「ぎゅっ……っ」

『短い思い当たる節はそれ位だからな』

コレットはカイトの言葉に一日中考えていたであろう事を話し出した

「昨日の事何だけど夜にクラトスさんやリフィル先生達と一緒にロイドの家に行ったの」

『……そうか』

「それでね？ロイドと一緒にベランダでお話したの。そしたらね、ロイドが“俺も一緒に行くー”って」

『阿呆が』

コレットを困らせてどうする

「でね、危ないし、着いて来て欲しくないから、私………“嘘”………
ついたの……」

村を出る時を昼とでも言ったのだらう………それでジーニアスの反応

が解るが

「最低……だよな……嘘……ついて、期待させて……」

声色が変わり、地面に水滴が落ちる……

『そんなに自分を責めるな……それがその時の最善だったのだから？
それにロイドのあの性格を考えても必ずついて来ると言うだろうし、
それしかロイドを安全にイセリアに留まらせる方法が無かった。』

「でも……でもっ……」

この子は……コレットは優しい……優しいからこそこんなにも困って、傷付き易い

「ふえ？」

『泣きたいなら泣けばいい……俺の胸くらいかしてやる。だから、
今は目一杯泣くと良い……明日は気持ち切り替えられるように
な』

この先はモンスターの強さは増し、試練も熾烈になると予測出来る。

「カイは優しいね。」

『俺は優しくなどない……酷いヒトだ』

「そんな事『コレット!』えっ!?!」

コレットを抱き上げてその場から跳躍すると先程までいた場所に狼と驚のようなモンスター……ウルフ6体とホークが飛び込んできた

「えっ!?!」

『コレットは逃げる』

「でもッ!?!」

『俺が戻らなかつたらクラトスやリフィルを呼べ!』

「そんな事『お前に……コレットにもしもの事があつてはいけない事を解ってくれ』……直ぐに先生達を呼んでくるからね!」

コレットが駆け出してカイトがシャルティエ達を抜き構え様とした瞬間……

「キャッ!?!」

『コレット!?!(間に合えッ)』

カイトはコレットが逃げた方を振り向くとどこに隠れていたのかウルフがコレットの逃げ道を遮る様にして、飛びかかる

その時、何かを裂く音が夜の空に響いた

s t a g e 2 (後書き)

御意見、御感想を宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5082z/>

少年の異世界戦記 ~ T O S 編 ~

2012年1月1日00時45分発行